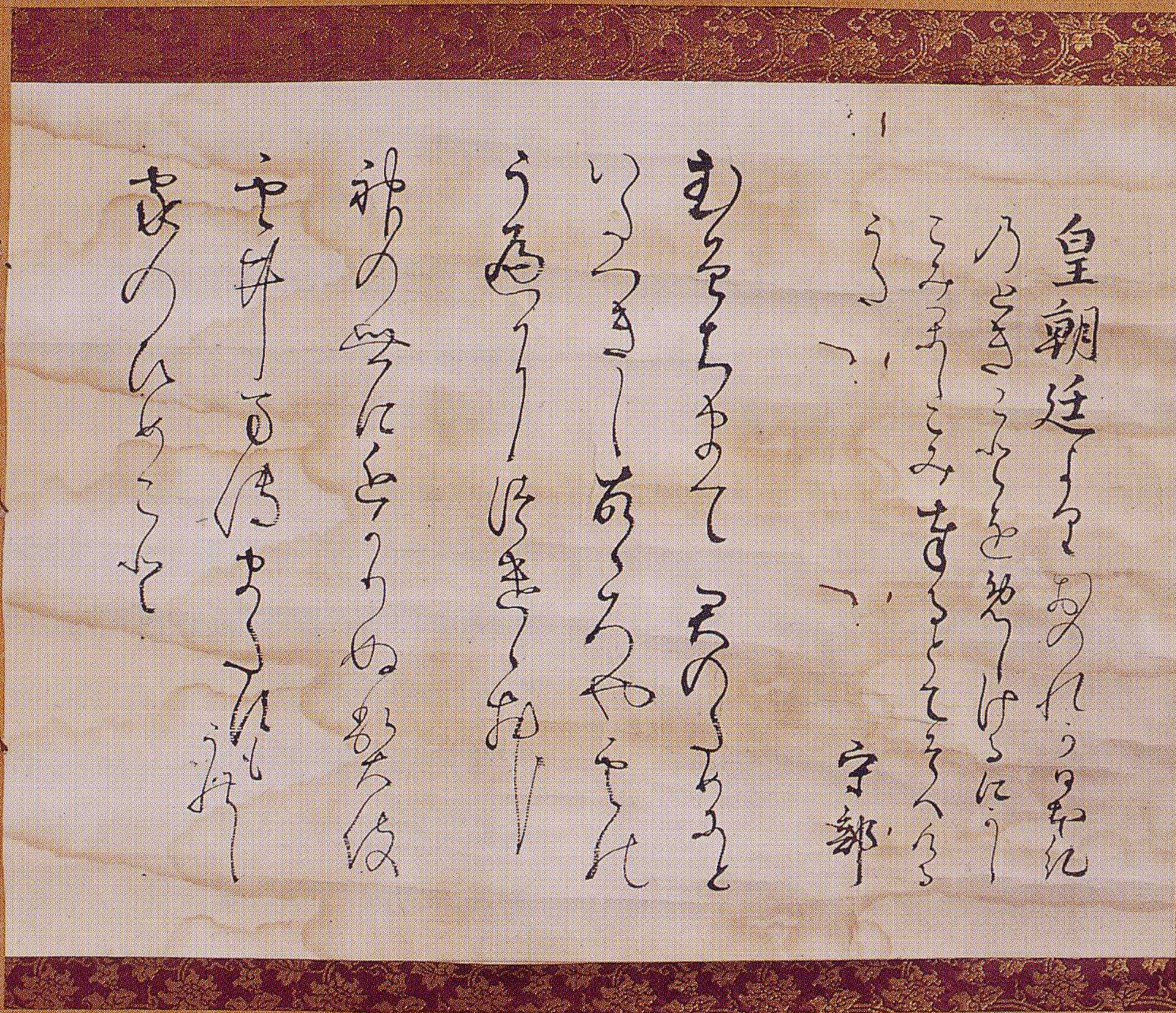


季報

No. 78

2010(平成22)年
11月



『橋守部和歌懐紙』

目次

- ◆ P2 『甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント』 中川 桂
- ◆ P3 ジャン・ジャック・ルソー著『エミール』 岩田幸訓
- ◆ P4 北米古医書調査余録 町 泉寿郎
- ◆ P6 「最近の一冊と読後感」 水戸英則
- ◆ P7 九段校舎 図書館だより
- ◆ P8 柏校舎 図書館だより

〔思い出の一冊〕

甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント 有山 輝雄

文学部 専任講師 中川 桂

「思い出の一冊」というよりも「思い出の場所にまつわる一冊」といった趣になるが、阪神間で育った私にとり、阪神甲子園球場はごく身近な存在だった。小学校に入学し野球が分かるようになってきた1年生の夏休み、父親は早速私を甲子園の高校野球選手権大会…いわゆる「夏の甲子園」に連れていった。以来、高校野球にプロ野球(阪神タイガースの応援)と何度も足を運んだ甲子園だが、その最初は高校野球の観戦だったことが思い出される。

甲子園で開催される高校野球の全国大会は、夏の大会のほかに「春のセンバツ」と呼ばれる選抜高校野球大会もあり、年間に春・夏二度の大会が行われている。だが同じ甲子園での開催なのに、なぜか各々が別個に独立したものとして扱われているのが初めは不思議だった。

最も顕著な例は出場回数だろう。例えば夏の大会に過去何度となく出ている常連校であっても、春のセンバツに初めて出ると「初出場」とカウントされる。ましてや細かな違いを挙げていけばきりがない。そもそも春と夏では出場校の選出方法が違う。優勝旗の色が違う。その授与にしても、夏は優勝校だけに旗が授与されるのに、春は準優勝旗というものがある。対戦を決める組み合わせ方法も若干違う。さらに大会歌が違う。開会式の入場曲が違う。プラカードを持って先導する若者たちの所属が違う。そんな細かなところまで、なぜいちいち差別化にこだわるのか?

その理由を高校野球に興味のある方なら多少はご承知だろうが、歴史的な経緯を踏まえることで明確に理解できるのが本書である。結局のところ、野球大会は新聞社が大正年間に自社の宣伝と権威化、また販売拡張のために開始した「メディアのつくったイベント」なのであって、各紙横並びで報じられるニュースとは異なる、その社独自の報道対象を創出するものだった。夏の大会は大阪朝日新聞社が1915(大正4)年、そして春の大会は大阪毎日新聞社が1924(大正13)年、旧制中学野球の大会として始めたもので、当初はそれらが新聞の販売拡張戦略や私鉄による沿線開発とも結びついていた。甲子園球場が誕生するのは1924年の「甲子」^{きのえね}の年だが、それ以前に始まった夏の大会の第一回は、現在の阪急電鉄の乗客誘致・沿線開発策とタイアップした結果、大阪府豊中市の豊中球場で開催されて

いる。春の大会に至っては、その第一回が名古屋で幕を開けたが、これも大阪毎日が名古屋方面へ販売を拡大したいがための戦略から発したことなのである。当時の最大マスコミである新聞社のライバル二社が競合した結果、野球という本質が変わらない以上、むしろ細部において差異化が図られた二つの大会が生まれたのだった。このような経緯に興味のある方は本書「全国優勝野球大会の形成」の章をご一読願いたい。

ところで、この書が刊行された1997年には、私はすでに研究の道を志していた。だから最初にこの書を手にした時は純粋に趣味の分野の本として読んだのだが、伝統芸能という娯楽を研究対象とし、その歴史研究を行っている自分にとって、野球という娯楽を対象として大会の開催を歴史的に考察していくこの書は、その手法に共通点があり参考ともなった。

開催初期の事情を見ると、例えば落語史と通ずる点も多い。1927(昭和2)年、夏の第十三回大会からラジオ中継が開始されたが、その前年に打診があった際には阪神電鉄が、中継されると甲子園まで観客が来なくなるとして拒否している。しかし実際に中継が開始されると新たなファンが増え、いっそう観客が増加した。これはラジオ対寄席の関係と全く同一である。「家で演芸が聞ければ誰も足を運ばない」と考えて芸人の出演を禁じ、そんな興業側に反発した初代桂春団治が大阪ではなく京都の放送局からラジオに出演したエピソードがあるが、一新聞社の始めた野球イベントが今日のごとく国民的行事といえるまでに浸透したのは、新聞・ラジオ・そしてテレビの報道や中継があったからこそなのだと再認識させられる。



「リニューアルされた甲子園球場の外観」
(2009年3月)

〔思い出の一冊〕

私の学生時代と読書 ジャン・ジャック・ルソー著『エミール』

国際政治経済学部 専任講師 岩田 幸訓

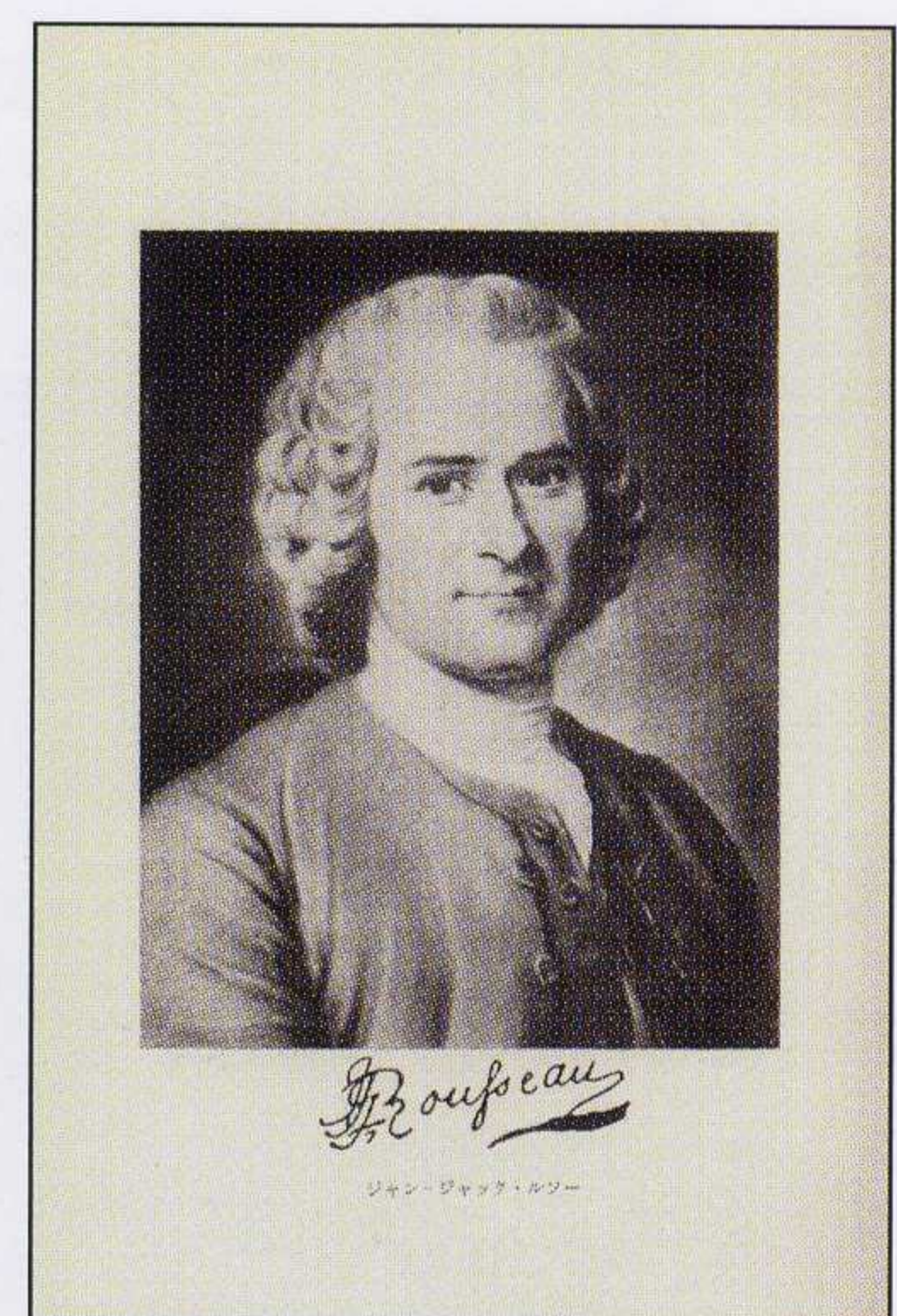
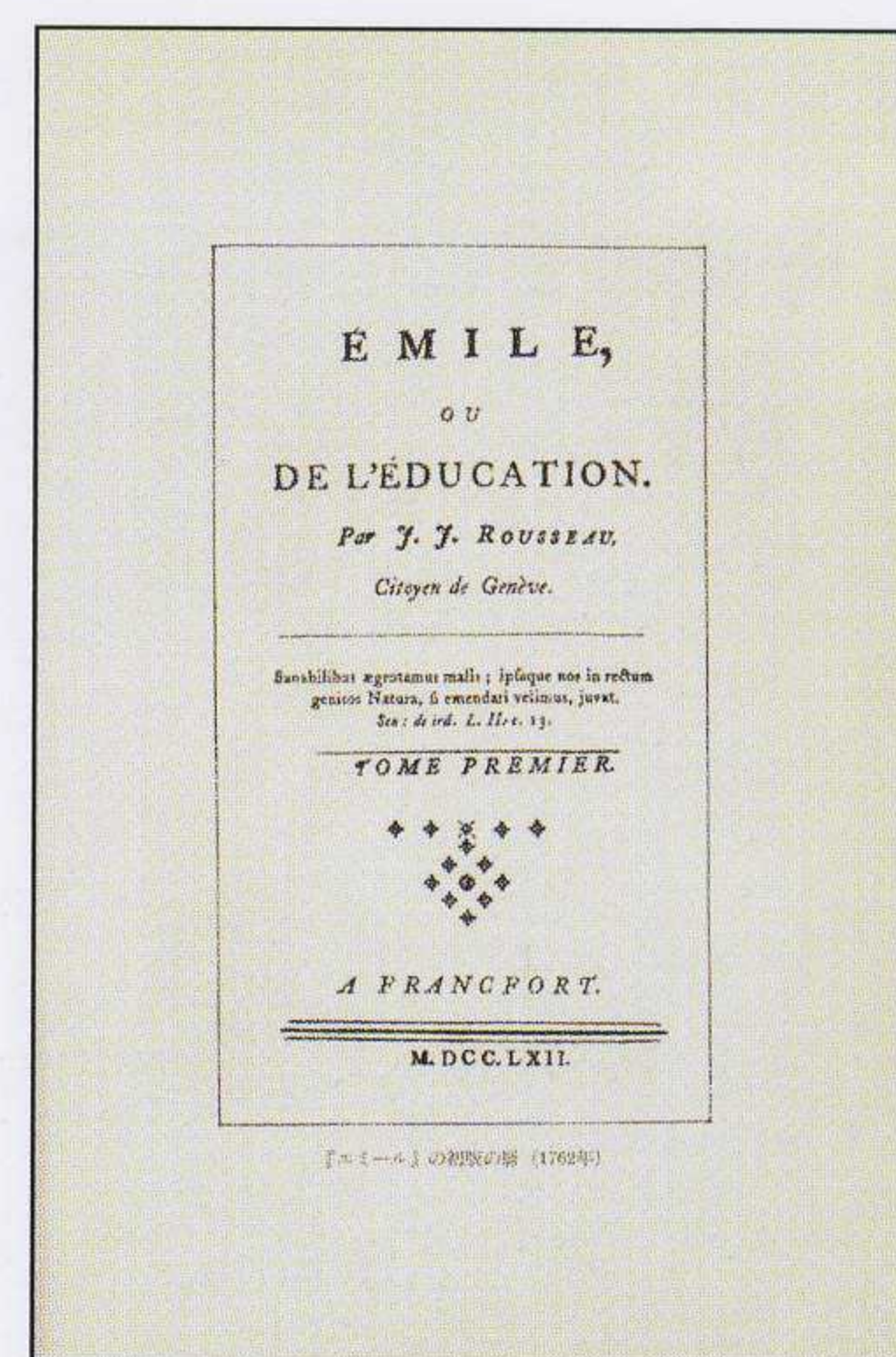
私は大学に入学した当初から高校教育までの与えられた問題にできるだけ速く、正確な解答を出すといった学習から解放され、自分自身の興味関心にしがたって、自分が重要だと思ふ問題に取り組みたいと願っていた。高校時代から自分の興味が向かないことを理解したり、暗記したりすることは得意ではなかったし、かなり苦痛を伴うことであった。その一方で、自分が興味を持ったことはとことん突き詰めて考えたいという知的好奇心はあった。高校までの選択の余地が限られた教育への反動からか、大学に入学してからは自分の興味関心にしがたって徹底的に勉強したいという気持ちがかかなり強かった。

学部の学生のころは、当時としては自分なりに必死に勉強したつもりだが、自分の問題意識を表現する手段が自然言語に限られていたので、自分の思いや考えを的確に表現することができず、どこかもどかしさを感じていた。当時は若気の至りというべきか「人間如何に生きるべきか」、「他者や社会とどのように関わるべきか」などといった漠然とした問題に対して自分なりに解答を出したかったと言える。結局、学部時代には自分の問題意識がどこにあるのか収斂することもなかったが、先人の思想に何らかの手がかりがあるのではないかと直感的に考えていたので、思想・哲学に関する多くの書籍を読んだ。もちろん、これらの難解な書籍を一読しただけでは、その内容を理解できるはずもなく、それらの大部分を忘れてしまったが、これらの書籍を読んだことは自分のものの見方や考え方に何らかの影響を与えていると思う。

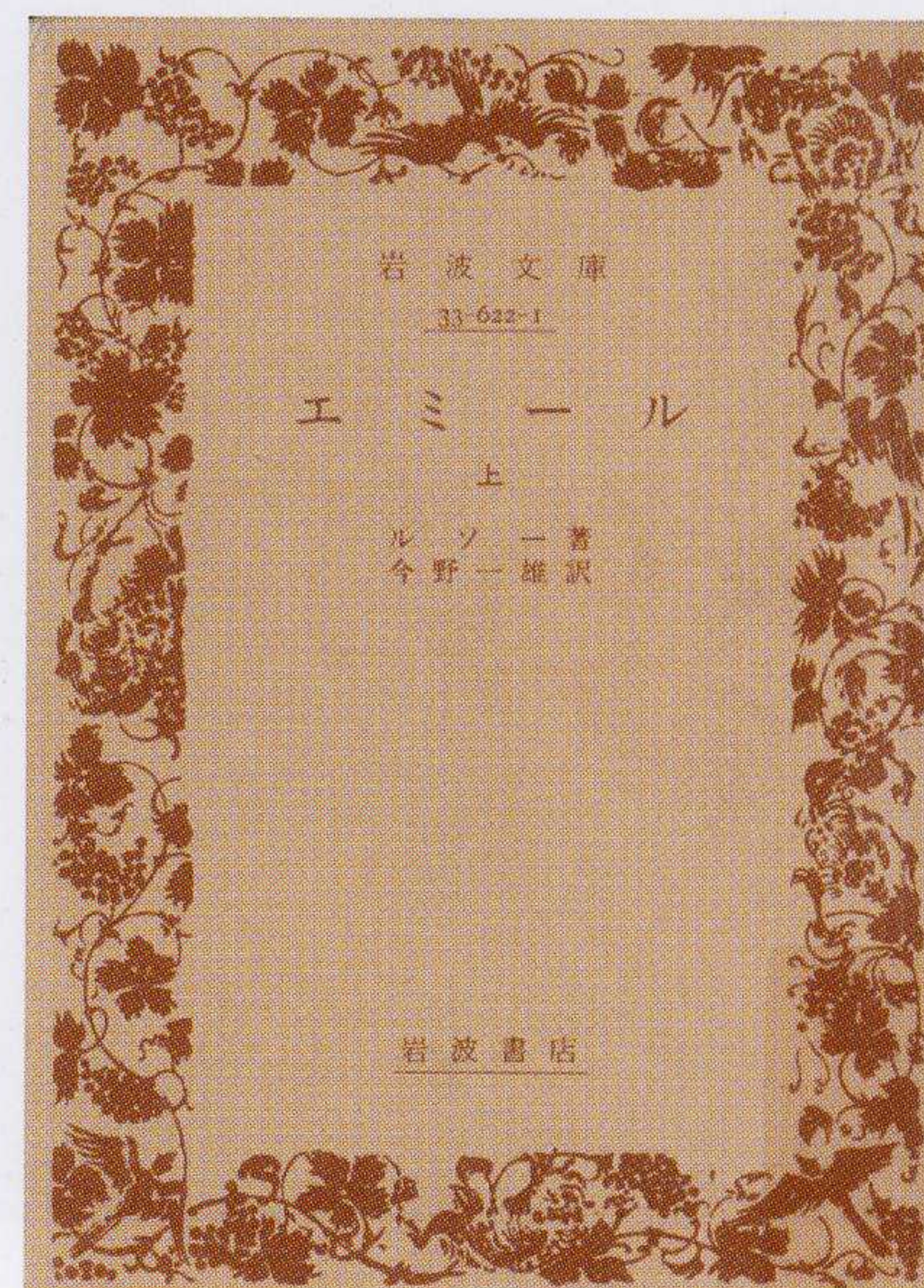
この大学の専任講師として着任する前に学部の学生のころに読んだ書籍の大部分を手放してしまっただが、ごく一部の気になった書籍は現在も手元に残してある。そのなかの一冊にジャン・ジャック・ルソーの著した『エミール』がある。『エミール』は副題「教育について」からもわかるようにルソーの教育小説であるが、生きていくうえで参考にすべき名言がちりばめられている。たとえば、『エミール』のなかでルソーは「生きること、それは息をしているということではない。それは活動である。わたしたちの全器官、全感覚、全能力、私たちに生きていくという意識を与えてくれる心身のあらゆる部分をつつようすることである。もっとも多く生き

た人とは、最も多く年数をかぞえた人のことではなく最も多く生きがいを感じた人のことである」と述べている。これを私なりに解釈すると、人間の寿命は人生の量を反映するものであって、決して人生の質を反映するものではなく、人生の質は自らが内省的に評価する生き方を生きてはじめて高まるものだということになる。もちろん、評価に値する人生を送るためには十分な期間の人生が必要なことは言うまでもないことである。

大学院に入学して、現在専門としている厚生経済学が扱う問題対象と分析方法が自分の考えている問題をうまく表現してくれるのではないかと気がついてから、私の取り組むべき問題の方向性がようやく定まった。現在では、私は厚生経済学者として研究生活をしているが、高校時代から思い描いていた職業の第一歩を踏み出せたことは高く評価してよいと思う。学生諸君も自分が評価に値すると思う生き方を見つけ、それに向かって努力して欲しいと思う。



『ルソー エミール』(「玉川大学出版会」より)



北米古医書調査余録

文学部 准教授 町 泉寿郎

2007年度から科研⁽¹⁾の分担者として、北米の図書館に所蔵される日本古医書の目録化のために、渡米して調査を実施した。この間に訪問した機関は、カリフォルニア大学サンフランシスコ校(以下UCSF)、同バークレー校、同ロサンゼルス校、議会図書館、国立医学図書館(以下NLM)、ハーバード大学燕京図書館・医学部図書館、プリンストン大学、コロンビア大学医学部図書館・C.V.スター図書館、ニューヨーク市立図書館等。アメリカのみで、カナダは全く未調査である。このうち質量ともに双璧というべきは、NLMとUCSFである。そこで実見した古医書については、既に日本医史学会・洋学史学会・EAJRS等において報告し、一部のコレクションについては論文⁽²⁾を作成し、また近く報告書も刊行する予定なので、今回は自ら資料購入やその整理に当たり、日本コレクション形成に尽くした二人の日本人司書を紹介したい。以下は彼女たちからの聞き書きをもとに起稿したものである。

'56年～'91年までUCSFのライブラリアンとして勤務し、同館の2,000点に近い日本古医書を収集整理された南淳美氏は、1921年サンフランシスコ生まれ。父親を早くに亡くされ、小学生の時に一家で帰国し、母親の実家である伊東の温泉旅館に身を寄せた。津田塾の英文科に学び、戦争末期に作新学園と伊東高等女学校で教員をした後、敗戦後は静

岡軍政部に通訳として勤務した。当時、日本人とアメリカ人とは給与に雲泥の格差があったので、米国生まれの氏は市民権を取得され、'48年7月に単身サンフランシスコに渡航。当時、日本からドルを持ち出すのは制限があったので、渡航時、ごく少額しか手もとになかった。生活費を稼ぐために、はじめ北米毎日の記者(後年の夫君)に頼んで翻訳の仕事をもらい、その後アメリカン・ボイスというラジオ局でアナウンサーの仕事をした。渡米した日本人をインタビューする仕事で、川端康成にインタビューしたことがある。

その後、氏はUCバークレー校に入学し、'52年に社会学のBAを取得され、はじめサンフランシスコ州立大学図書館に就職し、翌年UCSFに移った。UCSF就職後、図書館学を修める必要を感じ、再度バークレー校で図書館学を修め、'56年からUCSFの正規のライブラリアンとなった。氏は、解剖学と医学史の教授で図書館長を兼ねていたDr. John B. Dec M. Saundersに命じられて、2万ドルの予算を付与され、'63年、'64年、'68年に日本で古医書を買付けた。東京では井上書店・大屋書房・浅倉屋書店、大阪では中尾書店が、主な購入先であった。この3回の買付けでUCSFの日本医史学コレクション⁽³⁾の基礎ができ、その後は参考書を中心に購入し、また富士川游『日本医学史』を手引きとして脱落している古書をカタログで補っていった。



南淳美氏(2009年3月バークレー校内で)



甲斐美和氏(Kent Hall C.V.Starr図書館の前で)

保存と出納のことを考え、京都の大森雅泉堂で帙を作らせ、立架式に収納した(2008年2月19日、5月17日聞き取り)。なお参考書は、昨2009年バークレー校に新設された東アジア図書館に一旦移管された後、NLMに集約されたとも聞くが未確認である。

次に、'43年～'81年までコロンビア大学C.V.スター図書館のライブラリアンとして勤務した甲斐美和氏は、'13年サンフランシスコ生まれ。祖父甲斐織衛は、中津出身の慶応義塾の古い卒業生で、サンフランシスコに渡って貿易会社O-KAI商事を起業した。美和氏は関東大震災の年に家族と来日したが、日本の生活になじめず、単身サンフランシスコに戻り、再来日して東洋英和に学んだ。ピアノをやっていたので、ショパンの故郷ワルシャワに行かなければと思い、行ったこともある(4)。その時は結局、各国の日本大使館を頼って3ヶ月ほどのヨーロッパ旅行になった。その後、渡米したため、日米開戦によってカリフォルニアで2年間キャンプ生活を送った。友人女性が秘書の職を得てキャンプを出たので、その人を頼ってニューヨークに出て、全くの偶然からコロンビア大学でタイピストの職に就き、キャンプを出た。当時、図書館本館の丸屋根の建物2階に東アジア図書館があり、東アジア担当に缺員ができて、氏が図書館職員となった。同館の日本語文献は、角田柳作が日本の関係機関に働きかけて集めた蔵書が基幹となっている('36刊「日米文化学会 図書目録」)。

戦後、除隊された人たちが日本語日本学コースに復学したが、まだ日本との貿易が再開されていないので、関係者は日本語文献を渴望していた。その頃、満鉄施設や東亜研究所、海軍関係の水交社など、日本国内外機関から占領軍が接收した大量の日本語文献がサックに詰められ、議会図書館の書庫に送られてきた。議会図書館では、主要大学図書館に呼びかけて、その整理作業を行う人員を募集したところ、ハーバード、イエール、ミシガン、コロンビア、スタンフォード等から応募があり、各々2～3名の職員がワシントンに派遣された。氏も数ヶ月間、サック入りの書籍を棚から下ろし、サックを切り開き、書籍カードを作り、別の棚に揃えて並べ直す作業に従事した。重複本は整理作業者の所属図書館でもらうことができたので、昼食もそこそこに作業に

励んだものだった、という(2010年2月23日聞き取り)。

以上、彼女たちの談話は、各コレクションの来歴を知る上で不可欠な情報であるとともに、書籍に関する実務者の視点からの戦中戦後アメリカ社会を生きた日本人の体験談として貴重である。他にCharles Tuttleら外国人ディーラーのことなど、述べるべきこと調べるべきことは多いが、別の機会に譲りたい。



ベセスダの国立医学図書館



コロンビア大学キャンパス、左の建物が日本学科やC.V.Starr図書館のあるKent Hall

- (1) 文科省科研費助成 基盤研究B「米国国立医学図書館等の所蔵の日本古医書の調査・目録・データベースの作成」研究代表者:酒井シヅ、課題番号1940601
- (2) 町泉寿郎「小野蘭山門人、木内政章の事績と学績—カリフォルニア大学サンフランシスコ校所蔵の木内政章旧蔵書を中心に—」、『小野蘭山』、小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会、pp111～141、2010/06
- (3) UCSFの日本医史学コレクションについては、南淳美氏による「カリフォルニア大学サンフランシスコ校における東洋医学コレクション」(『びぶろす』37-12、1986年、国立国会図書館図書館協力部)を参照されたい。
- (4) 甲斐美和氏は、戦前日本を代表するコンサートピアニストとして活動し、'37にワルシャワで開かれた第3回ショパンコンクールに原知恵子と共に日本人として初参加(審査員にヴィルヘルム・バックハウスら)。本選出場はならなかったが、ヨーロッパ周遊後、'37～'38には国内や満州・朝鮮で盛んに帰朝演奏会を開いている。

「最近の一冊と読後感」

常任理事 水戸英則

経済には危機がつきものである。わが国は約20年前にバブルの崩壊を経験した。バブルの生成と崩壊は、17世紀オランダのチューリップバブル、同世紀末のわが国元禄バブル、18世紀英国の南海泡沫事件、20世紀前半のブラックマンデー、21世紀に入り米国のITバブルと各世紀毎に繰り返し起きている。今回2008年の米国バブル崩壊は、サブプライムローンによる住宅バブルの大爆発とこれを契機としたベア・スターンズ、ファニーメイなど住宅金融公社の連鎖倒産から始まり、米国第4位のリーマン・ブラザーズ証券(以下リーマン)倒産によって100年に一度という世界経済の悲劇の黒幕が切って落とされた。

本書の原題「Too big to Fail」とは、巨大な会社を潰すと、経済全体に大打撃を及ぼし、関連する影響が計り知れないため通常は潰さないという意味である。しかし、世界ナンバー4のリーマンは倒産し、その結果 世界経済は大きなショックを受けた。

リーマン・ショックの原因は、当時長引いた金融緩和の下で、ブッシュ政権の中低所得者層向け住宅ローン促進策により住宅ローンが急成長、この結果引き起こされたバブルを当時のグリーンズパンFRB(連邦準備制度理事会:米国中央銀行)議長が、米国の住宅価格が長期間下落していない状況もあって、半ば放置したことも一因とされている。加えてモラル欠如の米国投資銀行が、数理統計により培ってきたデリバティブ技術で住宅ローン債券を組み込んだ金融化商品を組成し、米国の一流格付け会社の高格付けを裏づけに、借入れによるレバレッジ(槌子)を効かせた自己資本を後ろ盾に、世界中の機関投資家に販売した。こうした中で、総資産65兆円のリーマンが倒産、これを契機に関連する全ての金融商品が紙くずに帰したもので、世界の経済損失は世界の年間総生産6000兆円の15%、約1000兆円との試算もある。

本書では、巨額の公的資金の投入に猛烈に反対する米国議会を背景に、最終的に追い込まれたリーマンは英国バークレーズ銀行を最後の拠り所とする。出資に前向きであったバークレーズに対して 本国への金融危機の飛び火を恐れた英国政府がNoを突きつけた。ブッシュ政権も議会の反対意見に抗しきれず、万策尽きたリーマンが、倒産

にいたる過程や破綻不可避と見られたAIG(米国の大手保険・金融グループ)が、救済された経緯が描かれている。下巻は、リーマン・ショックの連鎖で危機に瀕したメリル・リンチの内情のほかモルガン・スタンレーに出資をしたわが国三菱東京UFJ銀行の存在が描かれており、出資金であるこの「一枚の90億ドル(9000億円)の小切手」が無ければ、リーマン・ショック後の影響は更に加速度的に拡大し、世界経済は予想も出来ない事態となっていた可能性が高い。

本書に登場する金融機関トップ、政策担当者はいずれも名門エール、ハーバードなどのビジネス・スクールを卒業、転職を繰り返してきた上昇志向のやり手ばかりであり、彼らの専門的能力と働きぶりは敬服に値する。リーマンCEO(最高経営責任者)のファルド(経営者としては失格であるが)、その他 危機の渦中にあったメリルやシティグループ、モルガンなどの経営者や担当者、そしてソロス、ゴールドマン出身のポールソン財務長官のほかバーナンキ現FRB議長、ガイトナーNY連銀総裁(現財務長官)など現在でも米國中枢で活躍している人々が実名で登場している。しかし、金融危機はこうした専門家集団がいても引き起こされたことも事実である。

今回の出来事は、過去の経済危機の中では、未曾有であり、100年に一度と譬えられる所以である。危機打開に当たった関係者は、「人間が営み、創り上げた経済という生き物」の底知れぬ不気味な深淵を覗き込んだに違いない。不安感や危機感是对応を誤るとパニックをもたらす。しかし危機の正体を見極めて、対処しようとした政策担当者など関係者にとっては、建設的な不安感、危機感という形で、次の発展、成長の大切な原動力となったのではないか。今回、彼らのこうした努力の結果の評価はまだ決されておらず、その判定は後世が行うこととなろう。

不安や危機はひとたび乗り越えられれば、我々人類を進歩させ、かつ我々に自信を与えてくれる。従って不安や危機を正しく認識することが重要であり、この点は我々個人でも個々にふさわしい適度な不安感や危機感を持つことが進歩に繋がる原動力になるように思える(了)。



「リーマン・ショック・コンフィデンシャル 上・下
アンドリュー・ロス・ソーク著/加賀山卓朗訳、原題は「Too Big to Fail」

九段校舎 図書館だより

秋の読書週間

10月27日～11月9日の間、秋の読書週間企画として、ミステリー本関係のキャンペーンを行った。
過去20年間のミステリーベスト10や現代の人気作家の本等を展示・貸出を行い、盛況裡に終了した。



本学教員等出版物案内(抄)

- (1) 『黄金の言葉 和歌篇』
今西幹一企画 五月女肇志・土佐秀里・
針原孝之・山崎正伸編
2010年1月 勉誠出版
- (2) 『三島中洲詩全集 第2巻』
石川忠久編 2010年3月
学校法人二松学舎
- (3) 『二松学舎の学芸』
今西幹一・山口直孝編
2010年3月 翰林書房
- (4) 『世界同時不況下での生き残りをかけて』
手島茂樹・藤原弘共著
2010年3月 リブロ
- (5) 『近代日本の仏教者』
小川原正道編(小山聡子・町泉寿郎)
2010年4月 慶應義塾大学出版会
- (6) 『民俗文化の探究 倉石忠彦先生古稀記念論文集』
谷口貢・鈴木明子編
2010年5月 岩田書院
- (7) 『落語の黄金時代』
山本進・稲田和浩・大友浩・中川桂著
2010年6月 三省堂
- (8) 『近代日中関係史人名辞典』
中村義・藤井昇三・久保田文次・
陶徳民・町泉寿郎・川邊雄大編
2010年7月 東京堂出版
- (9) 『奈良 京都 文学散歩』
二松学舎大学文学部国文学科編
2010年10月 新典社
- (10) 『西鶴研究資料集成 昭和前期篇』
竹野静雄監修・解題
2010年10月 クレス出版

千代田区立千代田図書館企画展

千代田区立千代田図書館主催の企画展で、本学附属図書館所蔵資料が展示されます。

千代田図書館展示

歴代の江戸川乱歩賞にみる表紙のデザイン

～二松学舎大学図書館コレクションより～

江戸川乱歩の名を冠し、現在では推理作家への登竜門として知られる「江戸川乱歩賞」。二松学舎大学図書館が所蔵する、その歴代受賞作の初版本(カバー・帯つき)の貴重なコレクションを、千代田図書館で2回に分けて展示します。
半世紀以上続く歴史ある賞の軌跡を、装丁・帯のデザインという側面からご覧ください。

期 間	第一部 平成22年11月29日(月)～12月25日(土) 第56回(2010年度)受賞作、第3～31回受賞作
第二部	平成22年12月27日(月)～平成23年1月22日(土) 第56回(2010年度)受賞作、第32～55回受賞作
場 所	千代田図書館9階 ミニ展示コーナー ほか
休 日	平成22年12月26日(日)、平成23年1月1日(土・祝)～3日(月)
共 催	二松学舎大学図書館
問 合 せ	千代田区立千代田図書館 Tel. 5211-4289
ア ク セ ス	地下鉄メトロ東西線・半蔵門線、 都営新宿線 九段下駅 4または6番出口から 徒歩5分

CHIYODA PUBLIC LIBRARY

柏校舎 図書館だより

柏市立図書館・市内大学図書館合同企画展・講演会

《企画展》

秋の読書週間キャンペーン
10月27日(水)~11月9日(火)

ノーベル文学賞特集
2010年受賞者マリオ・バルガス＝リョサをはじめ
過去10年間の受賞者の代表作を集めた
同時特集:新書大賞2010

期間中、3冊以上借りた方に
二松学舎大学オリジナルグッズプレゼント
貸出レシートをカウンターにお持ちください
(数に限りがございます。なくなり次第終了させていただきます)

2010 国民読書年

秋の読書週間キャンペーン
10月27日(水)~11月9日(火)

ノーベル文学賞特集
2010年受賞者マリオ・バルガス＝リョサをはじめ
過去10年間の受賞者の代表作を集めた
同時特集:新書大賞2010

期間中、3冊以上借りた方に
二松学舎大学オリジナルグッズプレゼント
貸出レシートをカウンターにお持ちください
(数に限りがございます。なくなり次第終了させていただきます)

2010 国民読書年

《講演会》

合同企画展協賛として、講演会が柏校舎で開催された。講師は本学文学部五井信教授で、題目は「作家の誕生」。「作家」が誕生するに至った歴史的背景や、「作家」のイメージ、AKB48と夏目漱石との共通点などを題材とした、1時間半の講演であった。この合同企画展協賛の講演会は一昨年からは始まり、今回は3回目で、多くの方々が参加した。



表紙資料解説

橘守部和歌懐紙

守部の歌集『穿履集』によれば、弘化二年(1845)九月、内宮神官の荒木田久守を介して、『稷威道別』を朝廷に献じた際に和歌を詠んでいる。そのうちの二首を守部自ら認めたもので、『橘守部全集』『穿履集』の巻頭の口絵にあげられるなど、重要な資料として知られている。

二松学舎大学附属図書館
季報
第78号

発行日 平成22(2010)年11月20日
発行 二松学舎大学附属図書館
九段校舎図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話:03-3263-6364
柏校舎図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590
電話:04-7191-8758
印刷所 株式会社 サンセイ
電話:03-5614-2515